

3825字

院吟日本流精岳

ちよゑ

第7号(2000年1月発行)

特集 武道館・温習会に参加して

あつたと考えたい。
私としては、大会終了後の懇親会が、吟の道を追求する者同志で大変楽しく盛り上がったことが嬉しく、ほっとした気持だった。最後に、早朝から応援に駆けつけ下さった吟友に心から感謝。

一心一体の興奮と感動
清水教場 山手 英三

清水教場　山手　英三

武道館

貴重な体験を今後の糧に
丸の内第一教場 林 筑泉

快晴の早朝七時、靖国神社の大鳥居前に五十名全員元気に集合。宗家初め本部役員の激励に送られ、武道館に向かう。到着してみると、全国からの吟友が整列、盛んに各チーム毎に練習に励んでいた。磯田先生の指導のもと練習開始。九時五十分合吟コンクール開始。我々は四十番目の出吟。舞台裏に整列、人頭の点呼、登壇の準備、にいよいよ出吟だ。毎週積み重ねた練習が二分足らずで決まると思うと、胸が高鳴り、先導役としての責任と緊張感が全身に伝わる。第一声無にし、申し訳ない気持で一杯で責められて、出場できたことは貴重な体験で、このことに感謝すると共に今後の糧として生かしていきた。吟友が、心を一つにして目標に向

改めてステート台上に立った興奮と感動を与えてくれたものでした。この感動は、必ずやこれから吟道の精神に生き続けて行くものと確信します。選に漏れたとはいえない貴重な財産となりました。

「五十人一心一声」をテーマに武道館の舞台を目指した四ヶ月半の会長特訓は、「将に会が『一心一體』となつたことをお互いに確認し、結束の輪が拡がつて、益々意気盛んに発展して行く礎とななりました。捲土重来を期すとともに、更に「長寿讃歌」を実りあります」といいます。

末筆乍ら、先導役の林健泉氏には、合吟は勿論、懇親会でも私共の緊張感を解きほぐす役で大活躍されました。紙上をかりて感謝の拍手をさせていただきます。

満足感と爽やかさが残る
丸の内第二教場 高橋辰巳

出場前十回程明治生命ビルで合練習に入りましたが、毎回の出席者は三十五から四十名位で定数の五十名が揃うことなく、本番当の武道館出場と相成りまし。日は寒い朝です。出席者の出足は早く、集合です。出席者のほぼ全員が集まりました。六時三十分頃には飯田会長の他出席者の皆さん気合十分の感じで、「大鳥居下で」五十名の发声練習「九月十日」を一声。五十名の合唱は迫力満点でした。また、寒い中、我力満点でした。日々のために宗家にお出で頂き激励していました。だき、感謝の気持で一杯でした。宗家から元気よくと励ました。靖国神社に参拝し、武事の皇居では天皇即位十周年記念行事の三日目でした。

早朝七時より、靖國神社大鳥居下で総仕上げの合吟、宗家先の激励の辭、会長から「今朝の練習は最高! 戦友たちよ頑張ろう」の一聲で勇躍会場へ。最初めての武道館、その広大・華麗さに驚く。合吟コンクールには、各流派の五十七組がエントリーしておれり、さすがは「全国大会」と仰天。手際よい進行の中、アツといふ間に舞台上に「四十番・千代田岳精会」。九月十日(アナル)のアナウンス。懸命に吟じた、やつた! と心で叫びつつ自席に向かう。全国大会優勝者の吟詠と演舞、式典、構成番組「長寿讚歌」の豪華絢爛たる吟詠と演舞の後、いよいよ入賞二十五団体の発表。『三四・三七』

りに練習を積み参加した次第。五十人という大勢の合吟は、リーダーは重責であり、一方、他の者は「一人ぐらいい居ても欠けても」という気持ちになりがちであるが、練習でもこの辺の印象は否定できなかつた。当日、晴れで大舞台に上がつたが、構成員の一人だという気楽な気持ちのせいか、極度に緊張してあがることも殆どなく、自然体で吟じえたと思う。残念ながら入賞は逃したが、天下の武道館の大舞台で吟じたということだけで、オリンピックに参加したような気持で、大満足である。

友人に話したら、貴方の吟はすごい。参加を決断しただけ、あたったのである。「英断」に感謝する次第である。

神前に柏手を打ち、必勝を祈願する。武道館の杜に着くと、全員いやが上にも緊張する。黒の男子チームと色鮮やかな女子チームの出で立ち、武道館の周りは吟又吟の練習の増堀。

千代田の精銳は四十番目。意外に早く順番が来る。林リーダーの先導で、全員精神込めて合吟。無事終了。午後の部の剣舞。模範吟のアトラクションの後、結果発表。残念。しかし、再挑戦の時の糧にして武道館を去る。

武道館前の駐車場、広場、道路には、全国から参集した人々で一杯。また、大型バスも多数目にきました。

武道館入场。合吟コンクールが始まり、千代田岳精会は四十番目の出场。アツといふ間の出来事で、吟の出来栄えもわからず私は、で吟のチラムの吟を「見聞」して吟の素晴らしさを堪能するばかりでした。

今後ももっと勉強していかなければと思いつつ、感激の連続で一日を過ごしました。私の一生の良い想い出ができました。

ていた。早朝より激励に来て戴いた渡精華先生を始め多くの吟友・応援の女性軍団と共に開会の直後、宗嗣先生が駆けつけられて会は最高潮に。誰かが『来年こそ入賞だ!』と一年が増えるだけだ』と大拍手。これが平均七十?歳の、しかも大半がキヤリア二年未満の軍団の心意気だったのだ。千代田七教場の吟友との固い契りと岳精会全体の強力パワーを体感した、井の中の蛙が大海を見て更なる精進を心に誓った大会初出場だ。

